

引く。何時何分をも知ることができ、支那や阿蘭陀時刻も記される重宝な計測器で「眠景規」ともいう。一種の日時計でもある。

遠藤数馬は十数年に及ぶ長年の研究開発の結果、新しい観測機器を完成した。ただちに斉広が隠居所として政務を執っていた竹沢御殿へ登り、発明された機器を披露し、献上した。前の藩主、斉広は家督を譲ると竹沢御殿を建て政務の場として、若き優れた藩士を集め藩政の改革を断行しようとしていた。制度疲労を起こしていた藩政の制度を活性化するためのひとつとして軍制改革とともに蘭学を急速に取り入れようとしていた。医学とともに天文方も期待されていた。

「お帰りなさりませ。まずは、御刀を」

定は、喜びを隠さぬ夫をたしなめた。

「おお、そうじゃな」

腰のものを抜き取ると刀を渡した。妻の定は着物の袖をそつと折り、刀を受け取る。

日ごろ寡黙な夫の数馬が嬉しげに話すのを好ましく受け流して、着替えを手伝う。あらためて座りなおして、

「おめでとうございます。あなた様の長年のご苦勞も報われたかと存じます。今宵はお酒などご用意いたしましたよう」

襟を正して祝いの言葉を口にする。

「うむ……」

開け放たれた夜空に目を遣りながら数馬は頷いた。

…思えば、天保に改元されて以来、天変地異が相次いだ金沢の城下は大火で焼き払われたうえに、夏になつても袷がほしくなるような肌寒い年が続いた。天保七年、八年、九年と大飢饉じゃった。百姓には、とらせ団子を食用にするようにと郡奉行所から布告まで出した。それもこれも天空の日輪は無論、月や星の運行によって天候や災害が動かされているのではなからうかと思わざるを得なかった。これを知れば備えの手立でもあるやもしれぬ、否、確かにある。

「とらせ団子か」

「なんでござりまする。お団子の方がよろしゅうございますか」

数馬のつぶやきに、妻の定がさりげなく応える。

「おお、聞いていたのか」

「向こうに、御膳の用意ができてござりまする」

「もう数年にもなるか、百姓衆に“とらせ団子”を食せよと郡奉行所から布告をしたことを覚えていられるであろう」

「はい、あのころは、酷い飢饉でした」

「わしはのう、『天保七八不熟飢饉略記』と記された書付を目にした時、不覚にもあらためて涙した……。食するものはない。山野に生える草を食べ、飢えを凌げよとな……」

数馬は臙に輝く月を眺めながら、言葉をかみしめるように続ける。

「この節はからむしの根、鳥あしぐさや 尾つつ とらせの葉など朝から晩まで ばばかか むすめなど野山をかけあるき これぞ命つなぎよと 摘みかかるこそすさまじけれとな記されてあった。減免した年貢すら納めることが叶わなかった。百姓衆が口にする米はずでに一粒たりともなかった。その上、海も不漁続きであった。牛や馬のごとく草を食べよとな、生きるということとはかくもつらいことか……」

「あなた様は御算用奉行として御役目を果たされ申しました。よくおやりになりました」定は、控えめだがはつきりと夫、数馬に言葉をかけた。定の凜とした言葉が数馬の胸に心地よく響き、好ましいと思った。

：臙に見える月は、不覚にも我が涙であるか。遠藤数馬、老いたり。

初夏とはいえ日が暮れるとやはり夜風は寒い。

「小ぶりながら金石から取り寄せた鯛でござりまする。上方からのお酒もいただいておりまする」

席につくと膳が運ばれてくる。

「角樽に尾頭付きとは……。これは、これは」

「先ほど三角様から、お祝いにとこのお酒をお届けいただきました」

背後の床には、拝領した絹二疋が三宝に乗せられている。その背後には数馬自ら筆を執った一幅の絵がかけられていた。絵には遠く河北潟の煌めきが広がり上手には、能登富士が描かれていた。泥絵という手法で描かれた絵は、西洋風の絵具と遠近法をとった構図で描かれる。「物の見方には、そのものをそのとおりに見る、作る。これを体写という。物を見たままに見る、描く。これを面写というのじゃ」数馬は物に対するにはどのような対処法があるかを明確にし書き記していた。

加賀随一の河北潟と能登の最高峰である宝達山を描いた絵は「心積法の観積法也」と自

らは言う。見たままを書いたというところであろう。自画像も一葉手掛けている。

「そのうちに、そちの肖像も一枚描いてやろうぞ」

髪に白いものが多くなった連れ合いの定の顔をまじまじとながめる。

「はいはい、ありがとうござりまする。そうですね、嫁入りしたころの姿絵でも描いていただきますよ。きつとですよ」

定は、さも可笑しいと口に手を添えて笑うばかり。

遠藤数馬は、天明二（一七八二）年二月十五日玉井主税五千石の家の四男に生まれ、寛政七年十二歳にして遠藤家に養子に入り禄高七百石を継ぐ。十六歳になると金沢明倫堂教授西村太冲に師事し天文学を学ぶ。西村太冲は越中砺波郡城端の町人の出自であったが、測量術や天文の学問に優れ藩校に招聘されていた。

二十歳になった享和三年、幕府測量方伊能忠敬一行が六月二十日大聖寺藩領内に入り、加賀、能登の沿岸を三十六日間にわたって測量した。

加賀藩は藩士が直接彼らとの交流を持つことを嫌い、文字通り慇懃無礼に扱った。下級藩士であった石黒信由が接点を持つ。伊能らが携えてきた測量機器の精密さに目を見張った。そのことを伝え聞いた若き遠藤数馬を大いに刺激したことは言うまでもない。

数馬は天文学と測量術に熱中する。彼らに負けない地図を作ることをお願い、ほどなく西洋式測量術による精密な金沢城下、金沢城の測量を果たし、地図とする。

文化十（一八十三）年三十歳のとき江戸に遊学し、帰城すると作事奉行となり文化十四年普請奉行を歴任する。

文政六年藩主前田斉広は千歳台に竹沢御殿を造営すると、数馬に新しく建てられた時鐘堂に正確な時刻を知らせる工夫を求めた。数馬はそれにこたえ、阿蘭陀時刻の知識を取り入れた十二刻を基本とした近代的な時刻法を作る。

千歳台は小立野台地が伸びきった最後の高みになる。御城（金沢城）は百間堀をもって小立野台地を切り離して縄張りがされていた。御城を搦め手から守る位置に千歳台はある。百間堀を隔て立つ竹沢御殿からの見晴らしは好い。浅野川が流れおちる河北潟、その先の日本海、能登の方角に目を遣ると能登富士と親しまれる宝達山を望むことができる。

数馬は、千歳台から見る景色が気に入っていた。

：見たままを絵に描いてみようと思ったのはいつであったか。殿に目通りをいただき、

新しい時鐘堂にふさわしい時刻を正確に知らせる工夫をせよと仰せられ、足しげく竹沢御殿へ登った。

行くときも帰るときも彼の景色に足を留めた。朝な夕なに目にするのは、雄大で見事な景色であった。絵にしようと思筆を執ったのはほどなくしてであった。

：我ながら好い仕上がりであったわい。

阿蘭陀医学を学んでいた黒川良安に阿蘭陀渡りの書を訳してもらった中に、西洋の絵師が描く絵の手引きがわしの目に留った。見たままを描く。天文の学問と同じではないか。あるがままを算術の対象とする。数値に置き換えることで理解する。心積の観積法で描くのじゃ。私は、試してみようと思うた。西洋の絵師の目を確かめてみたいと。

小禽小なりといえども庭先の近きにあらば、富士山もその影とならん。是奇とするに足らず。

天保十（一八三九）年五月九日、夏の天空はひたすらに青く晴れあがっていた。

「測量日和じゃわい。幸先が良いぞ。風蔵、理兵衛しかと測るのじゃ。まずは水平開地を設けよ」

遠藤数馬は三角風蔵、早川理兵衛の両名を従えて口能登の高松海岸に出張っていた。それぞれには足軽数名が従っている。手に、手に、標竹や間縄、間竿などの測量の道具を持ち、磁石盤を持って従う。総勢は数十名にもなるうか。たびたびの測量に慣れ、足軽一人一人にも無駄な動きはない。自動測量器の間打車も一台用意されていた。

当時、測量器は測量する者たちが自分たちで工夫して作成したものを使っていた。磁石盤で方位を知り、高さ低さは象限儀で見積もり、間打車などで距離を測った。当然ながらこれらは、遠藤らが手作りで製作した測量機器である。これらを駆使し、朝は、夜が明けると同時に、日が暮れるまで観測を続ける。測量隊は十数人から二十名ほど、街中の測量では物珍しさに女子供はいうに及ばず、男どもも手を留め足を止めて群がり集まる。町中、見物人が数多でお祭り騒ぎ。足軽が二人、三人で見物人を整理しなければ思うように測量ができないほどであった。

「遠藤様、開地は左右十町、計二十町でござりまするな」

風蔵は基線となる水平開地の長さをあらためて確かめた。

「うむ」

数馬は頷く。

「砂浜のことゆえ、普請は造作もないことでござりまする」

こともなげに理兵衛はいう。

風蔵と理兵衛は、数馬に挨拶すると左右に分かれ足輕を指揮して作業に取り掛かる。

海岸一带は塵浜といわれ、少し風が吹くと飛び砂が猛威をふるう。わずかな松の疎林では田も畑もときには人家も砂に覆われ、防ぐことはできぬ大きな砂の被害が出る。だが、海風を遮る木すらない砂丘地は、二十町もの水平な開地を造るのに適していた。

この水平開地を基線にして測り、ほぼ真東に二里の距離にある三角の秀麗な姿を見せる能登富士の高さを図ろうとしている。初めは土地の肝煎りに頼み込み、手の空いた村人を動員して造成に取っかかっていた。

三角風蔵は河北郡二日市池田屋又三郎の倅、初め庄左衛門といった。文化七年足輕として仕え、本多利明に師事し測量術の皆伝を受ける。その才を遠藤数馬に見出され、金沢分間図作成に携わる。風蔵の名は、前田斉広に測量術を解説し教えた時、藩侯の風炮の保管を任されたことから風炮に因み、侯から直に三角風蔵の名を賜ったという。藩侯のそば近くに仕え、わずかながらも藩侯に伝授する技は評判通りであった。風蔵の測量術は、精緻を極めた。

「風蔵、明日は、宝達山へも人数を派遣しようと思う。山頂も雑木を取り払い見通しの良い場を得るよう、手配せよ」

簡単に測量を終えることができると考えていたが、測量観測には結局のところ八十日間に及んだ。終えたのは、閏六月二十九日である。数馬らは測量結果を整理し、計算をすすめた結果、能登富士の高さは三百五十五間六であるとした。

明治に入って陸軍陸地測量部が測量した結果は三百五十間、六百三十七米である。手作りの測量機器を駆使しての彼らの努力と結果は良しとせねばならない。無論、測量や開発費のほとんどが自費自弁であった。

「禿げ山となっている山はありがたい。目を覆う雑木などを取り払う手間が省け、測量も順調に進もう」

「百姓衆には、この山の入会地は死活の沙汰でござりまする。薪や田んぼへの肥料に、そ

ま取り場は欠かせませぬ。山麓の村々のどん欲なまでの採取は、一木も生えぬまでにいたるのは常軌を逸しているような気がします。なれど、百姓たちの心情を汲めばやむ終えぬ仕儀かとも……」

宝達山は、その形から能登富士と呼ばれ人々から親しまれた。山麓の村々の入会地となつてゐることから、そま取り場となり、草刈り場であつたことから禿げ山となつてゐた。川は雨が降ると滝のように流れ落ち、麓に洪水や土砂崩れをもたらす。やつと築いた堤防も瞬く間に川床が埋まり天井川となる。わずかに植林を試みるが、蟻螂が斧、詮無い努力であつた。涵養林の役割を全く期待できなかったのである。

「天文学を極め、天動地動の理を知り、気候の理を知るならば異変を予め知ることができよう。ならば、備えを整え洪水や大飢饉などは避けることができようものを。だがその前に山に木を植えることが必要か」

「遠藤様、早晩宝達山の頂を目指しまする」

風蔵が身支度を整えてやつてきた。

「相わかつた。この大地の大きさを測り申そう」

山麓からは、歩いて一刻（二時間）余りである。そま取りの道が山頂へと縦横に続いている。下草を刈り取り田の肥やしとし、雑木は薪にする。茸や木の実も少しは取れるが、量はわずかである。宝達山は加賀藩により金山として大いに開発されるが、長くは続かなかつた。金鉱脈はすぐに枯渇して坑道は廃道となり、副産物として葛がわずかに採れた。

「遠藤様、一休みなさいませんか」

三角風蔵は、竹筒に入った水を数馬に差し出した。

朝早いとはいえ夏の日差しは強く、のどは渴きをおぼえ竹筒の水は甘露であつた。数馬は、手拭いで汗を拭う。

「高松の渚線が見えるのう」

日も高くなり、手をかざすと海の輝きと点在する松林が見てとれる。数馬は携えた一卷張りした箱型の遠眼鏡を袋から取り出して目に当てる。理兵衛が指揮する測量組の蠢きが生手に取るように見ることが出来る。

山頂を目指す一行は、二十名ほども数える。測量機器をそれぞれに持ち、重いものは二人、三人で持ち上げていた。それ以外にも、食糧や道案内をする肝煎りらもいたから、大部隊であつた。

宝達山の頂からは、遠く立山、白山も望まれ、能登随一の山であることが分かる。

「お山では使えませんが、間打車、なんとも優れた測量機です。彼の機器は、遠藤様自らがおつくりになられたのでしょうか」

「否、拙者は、図面を引き使用する目的を伝えただけじゃ。無論、作る時もあるが。間打車は、大野に住まいする弁吉に頼んでみた。作ってはくれなかったが、作り方は教えてくれた。弁吉め、偏屈ものよ」

風蔵は荷の中から小さな包みを取り出して解く、

「遠藤様、大福餅でございますが、ひとつ召し上がりくださいませ。甘いものは疲れが取れます」

「ありがたい、甘いものも好みでろう」

破顔して数馬は、差し出された餅をうまそうに口に入れる。

「歯車の噛み合わせがむつかしいのではないのでしょうか」

「ある日、帰城の折、町家の子どもが『乳母車』に乗っておった。拙者はこれを見てはたと思ったのじゃ。輪の回った長さが、距離。測量の初歩じゃ。これを測量法に取り入れられないかと思うた。御公儀の測量方伊能忠敬殿が御領内の海岸線を測量せんと大聖寺飛驒守様領内に入ったと聞き及んだ時、どのような機器を携えているのか、どのような測量をするのかこの目で知ろうとした。御公儀測量方一行ゆえ、丁寧に対処せよ、不便なきよう接待せよとの御城からのお達しであった。だが、家中の武士は誰一人としても関わりをもつことは許さぬととう。後日、聞けば、御公儀測量方らしく、精緻な機器を数多く携え、その測量の技は巧みであると言わざるを得なかった」

「乳母車でござりまするか」

「そうじゃ、弁吉はのう、わたしの申している事を即座に理解してくれた。だが、しばし間をおくと彼のものは断りおった。『遠藤様、よくその法をご理解されている方が、自らの手で作ることが良いのではないのでしょうか』ととう。測量の現場での不具合や故障にその場に対応できねばならぬことをも見据えての答えじゃ。なるほど理屈じゃったわい」

「大野弁吉は、無礼にもそのように」

「だが、木車の構造を伝授してもらうたよ。外輪は一間にしてこれを中の木車で刻むのじやが、口で申すは簡単。工夫を重ねた。結果は知っての通り、誠に使い勝手がいい」

「はい、昨日は、高松では彼の間打車は大活躍でございました。誠に結構な、測量術には役立つ器械でござります。箱の外に取り付けた竹輪、これを六十回を回し、さらに左右に

一往復ずつ押し測りました。じつにありがたいものです、間縄をもって再び測りますれば、数値は同じ。基線は正確を求められますれば二度にわたる測量の結果を求めましたがいずれも合っております」

「基線は、二十町。こたびの頂からの測量で、この宝達山の確かな高さを知ることになるう」

足輕に持たせた標竹の先には采幣のように短冊状に切った紙が取り付けられている。竹の先、高いものは二間三尺余、取り付けた采幣のような白い紙がさわさわと風に揺れる。海から這い上がって来る風は遠藤数馬一行を涼やかに吹きぬけてゆく。

数馬らは、新しい草鞋を履きかえて紐を結びなおす。

「さても、出立じゃ」

立ち上がり腰についた埃を払い落とすと、再び山道を登り始めた。

文政十年のこの年、閏六月がある。すでに真夏。滴る汗が、麻の着物を濡らしてゆく。晴れた日、宝達山の四囲さえぎる物のない山頂からは、眺望は限りなく良い。霊峰越中山、加賀白山を見ることが出来る。越中の海が青く光り、御城のある金沢の街並みもおぼろげながら認められた。西に目を転ずると、海が輝き水平線が心なしか丸みを帯びて広がる。

測量組は、二手に分かれて天候を見計らいながら着々と機材を駆使して測量を続ける。

「今日は、天空は晴れ渡っておる。じゃが、夕刻には夕立が来ようぞ。申の刻までには、作業を終える」

この山王社からの距離を測れと、数馬は檄を飛ばす。山王社とは、宝達山山頂には手速媛山王社が鎮座していたことからそう呼ばれていた。

「海面見限じゃ、しかと測量せよ」

陣頭に立つ天分方遠藤数馬の姿は、生氣にあふれる。

海面見限りとは、水平線のことをさしたようだ。三角関数の応用で三角形の辺の里数を求め、

…この地球理数を我らの手で明証するのじゃ。過日、加賀・越中・能登の分限図を製作した。じゃが、それもこの地球の表面の一部にすぎない。精妙な地球の表面の理数を知ることが必須であろう。天文を知り、天の理を知れば、大飢饉を避けえぬとしても備えをすることはできるであろう。

宝達山山頂の実測の結果、その高さを三百五十五間六尺と出した。遠藤数馬は、その成果の数値に満足するものではなかった。

「再度、測量しなおす」

と明言して、数馬はこのたびの測量は終えることにした。

水平開地二十町から始められた測量の結果得られた宝達山の高さ、海面見限りまでの数値をもちかえり、蘭学から学んだ洋算を用いいつも和算によって算術を進める。

和算は、関孝和が体系を作り、微分積分にまで到達していた。我が国では、方程式理論は、西洋の学問に先立つこと百年、球面の面積をも求め円理として理論化していた。だがその普遍性や応用性において和算は余りに複雑で神秘的であった。遠藤数馬の知人、加賀藩士関口開はそのことに気づき愕然とするや洋算にまい進する。

測量組が、算出した結果がでた。

「緯度一度の里数じゃ。三十一里十九町五十五間二尺じゃぞ」

この時期、伊能忠敬が測った緯度一度の里数は、二十八里二分という。交流がほとんどない状況で天文学に身を投じた学究の徒が次々と大同小異の里数を算出していったことは、驚きに絶えない。粗末な手作りの測量機器は膨大な時間と情熱をかけて、そのほとんどが自らの手で作られる。計測機器製作の経費も基本的には自弁であったことから、その費えもわずかではなかった。

小ぶりの仏壇に並ぶ位牌に蠟燭に火をともし、手を合わせる。位牌の養父と養母に前藩主斉広からの言葉と生絹を拝領したことを数馬は報告した。

数馬は改めて居ずまいを正し用意された膳の前に座った。数馬は傍らに座り食事の世話をする妻の顔を見るたびに胸の内で手を合わせていた。食む俸禄も困難な藩財政を抱えることから藩士は、借り上げという名目で減じられていた。

…少し酔ったか、久々に心地の良い酒じゃ。だが、酔うわけにはまいらぬわい。今宵の星の観測をせねば。

「そちも、一献受けよ」

杯を妻の定へ渡し、手ずから酒を注ぐ。

「おめずらしきことを、ならば妾も御言葉に甘えてご相伴させていただきましょう」

作事奉行、普請奉行、金沢町奉行、算用奉行などを歴任した遠藤数馬は、加賀藩では高

級官僚のひとりであった。天保七年には、財政、民政を担当する御算用奉行の一人に命ぜられる。この算用奉行を嘉永六年、七十歳の歳を数えるまでの十七年間に勤めあげる。

本来ならば、自然諸役俸禄も豊かになったものであろう。だが、俸給は額面通りには渡されることはなく、天文学への情熱は益々募り、測量機器の製作に限られた収入が充てられて遠藤家の台所は文字通り火の車であった。

「定、そちには、苦勞をかける」

遠藤数馬の正室定は、年寄中支配前田弥助直内の娘であった。二人の間には三男三女に恵まれる。

「ほほほっ、どうかなさいましたか、それとも御酔いなされましたか」

いつにもない言葉に、定は笑みを零す。

「む、むっ、笑うとは何事ぞ」

「はいはい」

文政元（一八一八）年小将目付になると藩主斉広から、石黒信由が測量する加越能三州地図の作成を監督することとなった。二年後小将番頭となると西村太冲、三角風藏、河野久太郎らを指揮し金沢分限大絵図作成を指揮する。

遠藤数馬ら測量方は、測量機器を手作りで作ってゆく。こうしてできたのが間打車であり、四能導であった。

：竹沢御殿の斉広様に献上するに及んだ時、殿はことのほか御喜びであった。十七年に及ぶ苦勞と工夫の結実であった。「これはよきものを。ようやったぞ遠藤」との御言葉をいただいた時、感慨は一入だった。

天文学を極め気候の観測や測量術を応用し兵学への寄与を承った。長家家臣の河野久太郎のことを推挙したが、良かったのであろうか。

河野久太郎は、測量の技を求められて壮猶館で、西洋砲術の研究開発と指導に努めることになっていた。長い海岸線をもつ加賀では、異国船に対する脅威は日ごとに高まっていた。久太郎は多くの図面を書く。異国船を打ち払いお台場から攻撃するための砲術である。動く標的を、放物線を描いて飛ぶ大砲の弾でどうとらえるか。

久太郎は異国船を描いた標的に対してどのような仰角を取って砲を撃つかを計算してそれを示し、訓練に供した。浦賀へ黒船がやってきて以来、海防は急務であった。

天保最後の年、十四（一八四三）年二月夜空には煌めく無数の流れ星が走る。時代が大きく変わり始めたのであろうか。この年、加賀藩で天保の改革を進めていた奥村栄実が他界し政治が変わる。

数馬が還暦を迎えていたこの天保十四年、遠藤家においても大きく揺れ動く。三月には嫡女従が他界し、八月次女綱が病死した。翌年の弘化元年十月、久しく生涯を共にしてきた定が病を得て寂する。さらに弘化二年二月、後を追うように三女卯が病死した。

数馬は、妻、定へかける苦労を胸の内で頭を下げていた。

「定、今日は大勢押し掛けてくるぞ。雑作をかけるが頼むぞ」

「はい、心得ております。御夜食も整えるよう準備しています。三角様や太冲先生もお越しでしょうか」

この年天空に無数の流れ星を生じせしめたのは彗星であった。

文政八年秋にも大規模なポンス彗星が夜空を彩った。八月も半ばを過ぎたころから現れて九月初旬まで十六日間観測を続けた。観測堂を彦三町の遠藤邸とし、遠藤数馬をはじめとし天文方測量人は十一名を数えた。観測堂と言いつわしてはいるが、実態は物干し台を少々大きめにしたような施設に手作りの観測機器を並べただけの天文台である。

澤田義門、子午線司遠藤寛太郎、垂球司西村太冲、吉岡皆右衛門、子午線司兼燈燭司村田良助、象限儀司河野久太郎、在江府日坂理兵衛、眼病早川理兵衛、燈燭司清水宇八郎、燈燭司伊藤源兵衛そして数馬は垂球司兼地平経儀司を担当し、それぞれ部署を決めて毎夜観測を行っていた。観測の結果、これを星図に書き入れそれぞれの軌道を示していった。当時、西村太冲以下は、金沢分限絵図製作人であった。

九州でもポンス彗星が観測され、肥後細川藩士であろうか長野内匠という侍は「南方に不思議の星いずる是始而見ゆる毎晩いずる也」と記している。同時代に生まれ、同じ自然現象に相まみえたとき、これを不思議とは見ずに冷静な目で観察していた遠藤数馬ら加賀藩の武士たちと細川藩の侍との対応が面白い。

「遠藤殿、星の観察をする際、拙者も誘ってください。天の川をしかと見たいもの」

寺島蔵人と話したのは、竹沢御殿へ隠居している斉広から呼び出された日のことであった。坂の途中で後ろから早足で近付いてきた蔵人に声をかけられた。蔵人は絵を能くした。

文人画であったが、伝統にとられない筆致で描かれた多くの絵を残している。自然を観測する眼をもっていた。絵について少し話したのだが、何を話したのかはしかと覚えていない。いつにもなく会話が弾んだことを覚えている。

文政五年に隠居願いが公儀に認められた斉広は、隠居後も藩政を執った。文政七年竹沢御殿に家臣を招いて教諭局を開き政治を論議させる。その局員十二人のひとり之列していたのが寺島蔵人である。蘭学を学び、政治の得失を論じた。七月斉広は病を得て没し、斉泰が親政を執る。竹沢御殿はほどなく取り壊される。斉泰に登用された奥村栄実は、十一月、寺沢蔵人はその地位にないにもかかわらず政治を壟断したとして、禄を召し上げ能登島へ流罪とする。

「文政八年秋彗星出以恒星之座図其行轍」とした観測図がある。恒星を書き入れ日時と彗星の位置図が十数日間数馬ら観測方によつて描き込まれていた。

遠藤らは夜空を箒で掃いたようにして走る星が、すでに彗星であることを認識して科学的な観測を加えていた。

…あの星は、蔵人殿かもしれぬのう。蔵人殿には、竹沢御殿で時折会っただけだが、星が好きだというて、わたしに星の話を求めた。「いつなりとも拙宅へ来られよ。天文観測を」と誘っていたのだが叶わぬことであった。島では星を存分に眺められたのであろうか、流罪のまま亡くなられた。蔵人殿、今も若者の如き星のような目の輝きが心に残るわい。もつと絵の話をもみたかったが。…さて、小禽小なりといえどもとは、蔵人殿の言であったか。

「今宵も多くの星が流れよう。皆々、持ち場で流れ星を書き記していただくよう」
人数は先回の観測に比べて少なかったが、それぞれ持ち場を決める。

天保十四年二月に現れた彗星はグレート・マーチ彗星と呼ばれる。九州福岡では「何ぞ善悪にあらず」と書かれた。古来彗星は不吉な星と考えられた。

「忙しいとお口では申されていますが。数馬殿は、嬉しくて仕方ないご様子ですね。はい、御夜食ですね。熱い汁ものとお握りをご用意いたしましたよう」

「おお、ありがたい。夜は、ちと寒い故、熱燗を少々、願えるかな」

表からおとなう声は、三角風蔵か、

「奥方様、今宵、またお手を煩わせます。今朝ほど越中氷見からの巻きぶりが手に入りましたゆえ、これを肴にと」

荒縄でがんじがらめにされた二本の巻き鯛を片手に下げ廊下をやってきた。

「三角様、御出迎えもせず申し訳ござりませぬ。そのうえ、珍しいものを」

定は、笑みを浮かべ、風蔵の持参した巻き鯛を手にとると台所へとその場を去った。

「助かる。風蔵殿の観測術は抜きんでおる。こたびの彗星観測も充分の成果を得られよう」

数馬は部屋へ風蔵を誘おうとしたが、

「夕暮れまでにはまだ刻があります。今のうちに観測機器を点検しましょう」

座る間も惜しげに、風蔵は遠藤家に設けられた観測場へ向かった。

三角風蔵の実家は十村役をしている。風蔵が藩の天文方御用をこなすことで実家も村役人としての地位と経済力を上げていった。そのことは必ずしも悪いことではなく、潤沢な資金が天文方や測量方に供され観測機器の開発に寄与した。このたびの彗星観察にも多くの機材が新しく加わっていた。

「ところで風蔵殿、聞けば貴殿、極楽浄土への道程を測ったとのこと、如何であった」

「これは、お恥ずかしいことを。お耳に入りましたでしょうか。どうも数を申してさもわかったような顔をしている事に我慢がならないのです。つい、そのう……」

いたずらした子どものように頭をかき、うろたえた様子。

「意固地になってと申すか。その方の家から三千世界への道程を測るとは。さても、面白き測量と感心しておったわい」

笑みを浮かべ数馬は、楽しくて仕方ないといった態で右手に持った遠眼鏡を一方の手にポンポンと叩いた。

…寺島蔵人殿も三千世界への旅、ご無事で着かれたであろうか。いまごろどのような絵を描いておられるか。大殿にも似せて閻魔様でもお描きか。

日がとつぷりと暮れ真夜中に近づくと、金沢城下の夜空には美しく尾を曳いた彗星が流れ始めていた。

元治元（一八六四）年七月蛤御門の変が勃発する。斉泰の継嗣、慶寧は心を寄せていた長州に味方して、宮中警備の持ち場を離れ海津へ退く。加賀藩兵の執った行為は、幕府、宮中から非難を浴びる。これに激怒し驚愕した斉泰はただちにその罪を問い、慶寧に従った家臣らに切腹を命じた。側用人であった松平大弐が自刃し全責任を負う。斉泰は奔走して慶寧の助命を請い、謹慎にとどめたのである。これ以降慶寧は祭りごとに目を瞑り、す

べてに沈黙する。

加賀勤皇党はこれをもって壊滅する。歴史はすでに激動の時代に入っていた。

遠藤数馬、加賀藩が生み出した優れた天文学者であった。その著した書は約六十種類百巻に及ぶ。独自に手作り製作した観測機器、測量機器は、二十種類に達したという。激動の時代、科学者の目で天空に遊んだ生涯であったのかもしれない。数年後の廃藩によって加賀藩が消滅するという計測できない事態を見ずに、数馬は元治元年十月二十一日八十一歳の日を全うする。